



メルヘン短編 集

凧香

空を飛んだカエル

それは、長い雨がやんで百日目の夜のことでした。

草木の生い茂った小道の向こうから、ふたつの影が近付いてきました。ふたつの影の正体はカエルとコオロギでした。

カエルの名まえは、バリエ・ケランドフ。

コオロギの名まえは、ブラック。

カエルはどんなカエルでも、長くてカッコいい名まえを子どもにつけるのが大好きです。それなのに、子どもがたくさん生まれるので時間がかかります。名まえをつけ終わるころに、新しい子どもがまた生まれてくるので、カエルのお父さんはいつも子どもの名まえを考えているのです。

反対にコオロギはあまり名まえを考えるのが得意ではありません。だから、知らないうちに同じ名まえの子どもが何人もいることがあります。

そんな違いがあってもふたりは仲良しでした。

急に、ビューっと強い風がふいてきました。コオロギの細いあしに力が入ります。必死にかぶっていたぼうしを抑え強い風をがまんしました。

風がやむと、コオロギはカエルに言いました。

『今日は風が強いね』

『う、うん』

カエルはぶるぶる震えながら返事しました。でも、寒くてふるえていたわけではありません。

今日の夜はカエルが空をとぶ日なのです。とぶと言っても、カエルがとべるはずありません。鳥の背中に乗って森を一周するのです。それはカエルが大人になるために、みんながやらなきゃいけないことなのです。でも、風にとばされて鳥の背中から落ちてしまうカエルはたくさんいます。バリエのお兄さんはそれで死んでしまいました。

無事帰ってこることができたら、立派に大人の仲間に入れてもらえるのです。それにそのカエルは森のヒーローだと言われるようになります。

バリエはぶるぶる震えながらも、森の真ん中の広場にたどり着くことができました。

そこでは、森の友だちが集まっていて、バリエをはげましてくれました。でもブラックだけはなにも言わず、心配そうにバリエを見ているだけでした。

バリエを連れていってくれるのはタカのおじさんでした。

「それじゃ行くぞ!」

おじさんはそう言って、宙にうきました。バリエはあわてて急いで叫びました。

『ぜったい戻ってくるよ!』

その時、バリエにはブラックが少しだけうなずいたように見えました。

『どうだ、月がきれいだろう?』

バリエは落ちないようにつかまっているのがやっとで、空を見る気にはなれませんでした。でも、ふっと見ると、空に丸くて黄色いものが光っています。

『わあ……』

バリエがそんな声をだしたその時です。風がふき、バリエは思い切りとばされてしまいました。

『きゃあああー……』

バリエはタカのおじさんから落ちてしまいました。けれど、運良く木の葉っぱに引っ掛かりました。そのあと何回も風にとばされて木の高い所から低い所へちょっとずつ落とされて……最後には川の中に落ちてしまいました。
—ポチャン!

泳ぎながら、バリエはコオロギのブラックのことばかり考えました。タカのおじさんの背中に誰も乗っていないのがわかったら、どんな顔をするだろう。飛ぶ前、心配そうな顔をしたブラックが何回も頭の中に出てきました。

バリエはブラックのもとへ帰りたい一心で一晩泳ぎ続けたのでした。

帰ったら、きっとみんなはぼくを英雄扱いするかもしれない、バリエは思いました。

けれど、それよりも大切なのは、ブラックと泳いだり、歌をうたったり、月を見に丘をのぼったり。それが大切なんだ。そう思いました。

チョコレート色のバタフライ

ぼくの顔には生まれつき黒い蝶みたいな痣がある。二度と治らない傷跡みたいに。

みんなぼくを見ると、おかしい顔をするんだ。変なものを見たみたいな顔をするんだ。同じ人間なのに、それだけで"可哀想ね"って言う。悲しい目を向けるんだ。

ぼくは可哀想な子なの？

もっと、悲しいふりをしなきゃいけないのかな。

そんなぼくの隣りには、いつも大好きな女の子がいてくれる。公園の木の下でチョコレートを一緒に食べるんだ。

何度も好きって言おうとするけど、臆病なぼくは言えないでいる。

こんな可哀想なぼくを好きなはずないって。きっと、可哀想だから一緒にいてくれるんだ、なんて悲しくなるんだ。

その日も結局、言えないまま。何百回こんな気持ちを味わっただろう。

ぼくの"好き"って言葉は、チョコレートと一緒に飲み込んでしまって、甘酸っぱい気持ちだけが口の中に残ったまま。

けれど、

『きみのチョコレート色の頬、チョコレートの味がするのかな』

女の子は突然そんなことを言うと、ぼくの頬にキスをした。そうして、頬をストロベリーみたいに真っ赤にカラーリングしながら、わたがしみみたいなフワフワした明るい笑顔を浮かべた。

ぼくの頬に飛ぶチョコレート色のバタフライ。

甘いにおいを漂わせて、あの子の可愛い鼻をくすぐった。

可哀想なんかじゃない。

ぼくは世界一のラッキィボーイだと思う。

サーカスの猫

猫ちゃんどこへ行っていたの？

ロンドンへ女王さま見に行った。

そこで猫ちゃん何したの？

女王さまの椅子の下のねずみをびっくりさせてきた。

(マザーグースより)

あるところに、ネズミをつかまえることが得意な猫がいました。

猫は道端で捨てられていた所、サーカスの団長に拾われ育てられました。団長は小さい頃から、猫がネズミをつかまえてくると頭をなでて、おいしいものをいっぱいくれました。

猫は団長にいっぱい愛されたくて、一生懸命ネズミをつかまえました。

時々、団長はそんなに頑張らなくていいんだよ、側にいてくれるだけでいいんだよ、と猫の頭をなでて可愛がります。

けれど、猫は団長にそんな風に言われると、なんだかさびしくなってしまうのです。

『本当に、ネズミをとらなくても愛してくれるの？ ぼくのこと捨てたりしない？』

不安で、猫はネズミをつかまえていないと怖くて仕方がないのです。

『いまよりもっとたくさんのネズミをつかまえたら、もっと大きなネズミをつかまえたら、団長はどれくらい喜んでぼくを可愛がってくれるだろうか』

賞金首のねずみ

猫の気持ちはどんどんふくれあがりました。
そんな時、友達の猫が言いました。

『女王さまの椅子の下に誰にもつかまえられない、とてもすばしっこいネズミがいるみたいなんだ。つかまえられたら、賞金がもらえるそうだよ』

話を聞いて——猫はそのネズミをつかまえられたなら、団長はすごく喜んでくれるにちがいない、と思いました。

猫は心はずませて、団長の所に戻りました。そのことを笑顔で言うと、団長はとても悲しい顔をして猫を引き止めました。

団長は、絶対よろこんでくれると思ったのに——。

猫はとても悲しくなりました。泣きながら、団長の引き止める声にもかまわずに、猫はサーカスを飛び出しました。

——もう、いくらネズミをつかまえたって、ほめられないんだ。ぼくはどうしたらいいんだろう……。

猫はそんなことを考えながら、広場のはしっこにしゃがみこんで、しくしくと泣き始めました。

花屋の子猫

『やっぱりお兄ちゃんだ』

話しかけてきたのは、花屋さんで飼われている子猫の男の子でした。子猫はいたずらっ子のよ
うな笑顔を浮かべて、走ってきたのです。

『お兄ちゃんのしっぽが見えたんだ！だから急いで走って来たんだ。あたったよ！すごい？』
『すごいすごい』

猫がそう言うと、子猫は得意そうに笑いました。そして、団長の眼にうつるぼくもこんな風な
のかな、と猫は思いました。

『ぼくお兄ちゃん大好きなんだ。しっぽ見ただけで、会えるってうれしくなるよ！』

『好きなのは、ぼくがネズミとりが上手いからかい？』

団長には聞けないことを、猫は子猫の男の子に聞きました。

『ネズミとり？ぼく小さいから、ネズミのことはわかんないよ。たぶん、お母さんに教わるだろ
うけど。理由なんかないよ。お兄ちゃんと一緒にいたいんだ』

幸せのありがた

それを聞いて、猫は思いました。

ぼくも、本当は女王さまのところになんかいきたくないんだ。

ずっと団長のそばにいたい。一緒にいるだけで、すごく幸せなんだ。大きくて優しい手になでてもらうだけで、うれしいんだ。

団長もぼくにそばにいてくれるだけでいいんだよ、って言ってくれたのに。同じ気持ちだったのに。

どうして、わからなかったんだろう。

どうして、愛されてるって信じられなかったんだろう。

『ぼくも団長も子猫ちゃんも大好きだよ。ずっと一緒にいたいよ』

子猫はとてもうれしそうに頷きました。

猫が戻ると、団長は変わらず笑顔で迎えてくれました。

『おかえり』

『ただいま...ぼく、もうネズミとりやめるんだ』

『やめるのかい？あんなに楽しそうにしてたのに』

『ぼくがネズミつかまえなくなったら.....嫌いになる？』

猫の言葉に団長はびっくりしましたが、ゆっくり首を振りしました。

そして、不安そうに団長を見上げている猫を抱き上げました。

『嫌いになるもんか。ネズミとりが上手い猫がいいなら、もっと腕利きの猫を雇ってるところだ』

『うん』

それから、猫がネズミをとることはなくなりました。

捨てられた猫は、ようやく幸せを見つけたのです。